

茗 溪



新春特集

- I 教育再生への提言
～高大連携から高大接続へ～
- II ゆめ翔る

グラビア：01	新年のご挨拶	一般社団法人 茗溪会	理事長 江田昌佑：02～03
謹賀新年	平成25年	今年もよろしくお願いたします	：02～03
新春特集I	教育再生への提言	～高大連携から高大接続へ～	：04～08
	筑波大学副学長・理事	清水一彦	
	茗溪学園理事長	西野虎之介	
茗溪学園だより：09	新春特集II	ゆめ翔る：10～13	
第11回（平成24年度）	茗溪会の顕彰《茗溪賞》	：14～15	
茗溪会につくば公開講座から：16～17	世界を目指す日本サッカー	日本サッカー協会副会長 田嶋幸三	
英語誕生の「秘話」を明かす	筑波大学名誉教授	藤原保明	
平成24年秋の叙勲	おめでとーございます：18	葛飾支部主催	勉強会のお知らせ：18
桐の葉のつどい：18～20	追悼録：21	著書紹介：21	本部だより：22
編集後記：22			

meikei

正月
2013
No.1076



茗溪学園理事長
西野虎之介氏



筑波大学副学長・理事
清水一彦氏

新春対談
教育再生への提言 (P. 4～8 参照)
— 高大連携から高大接続へ —

新年のご挨拶
(P. 2～3 参照)



一般財団法人 茗溪会
理事長 江田昌佑



つくば公開講座

筑波大学名誉教授
藤原保明氏 ↑
日本サッカー協会副会長
田嶋幸三氏 ↙

(P.16～17 参照)

第11回茗溪会顕彰

(P.14～15 参照)

平成24年度、社会貢献に尽力され茗溪会から顕彰された方々は、団体7件、個人4件の皆さんでした。

平成24年11月26日(月)に東京・茗溪会館において第11回顕彰式ならびに祝賀会が、受彰者をはじめ来賓(大学関係、外部審査委員)や茗溪会理事長、理事ほか関係者が出席して開かれました。



今年もよろしくお願ひいたします

一般社団法人
茗溪会

千葉県立幕張総合高等学校 校長 佐久間 嘉 宏 (昭和50年卒教大武) (学校) 〒261-0014 千葉市美浜区若葉3-1-6 TEL 043-211-6311 FAX 043-211-6317	千葉県立柏中央高等学校 校長 伊集院 光 慶 (昭和51年卒教大休) (学校) 〒277-0835 千葉県柏市松ヶ崎884-1 TEL 04-7133-3141 FAX 04-7133-3641	千葉県立千葉女子高等学校 校長 萩 原 出 (昭和51年卒教大休) (学校) 〒263-0043 千葉市稲毛区小仲台5-10-1 TEL 043-254-1188 FAX 043-255-4170
千葉県立松戸馬橋高等学校 校長 木 村 香 住 (昭和52年卒教大休) (学校) 〒271-0043 千葉県松戸市旭町1-7-1 TEL 047-345-3002 FAX 047-346-5330	千葉県立千葉中学校・千葉高等学校 校長 高 岡 正 幸 (昭和52年卒教大休) (学校) 〒260-0853 千葉市中央区葛城1-5-2 TEL 043-227-7434 FAX 043-221-4014	神奈川茗溪会 会長 清水進一 (昭和43年卒 教大数) 事務局長 矢野正人 (昭和53年卒 修院農) (会長自宅) 〒254-0075 神奈川県平塚市中原1-25-24 TEL 0463-31-3350
一般社団法人 茗溪会 理事・監事一同 〒112-0012 東京都文京区大塚1-5-23 TEL 03(3941)0136	一般社団法人 茗溪会 理事長 江 田 昌 佑 (昭和30年卒教大休) 〒112-0012 東京都文京区大塚1-5-23 TEL 03(3941)0136	一般社団法人 茗溪会 副理事長 井口武雄 (昭和40年卒 教大法政) 副理事長 西川 潔 (昭和44年卒教大美 昭和46年院修美) 常任理事 田中正造 (昭和36年卒教大健) 事務局長
茗溪会山梨支部 支部長 佐 野 純 一 (昭和52年卒教大数) 〒409-2531 山梨県南巨摩郡身延町梅平1201-2 TEL 0556-62-1045 (県立身延高校)	京都茗溪会 支部長 塩見 均 (昭和47年卒 教大数) 事務局長 川合英之 (昭和56年卒 体育専門学群) (支部長) 〒612-0009 京都市伏見区深草西川原町36-1 コトーハイツ伏見稲荷A-127	大阪茗溪会大阪支部 支部長 新 堂 庄 二 (昭24年卒理四、25年研) (自宅) 〒541-0057 大阪市中央区北久宝寺1-6-14 TEL 06-6261-9200
茗溪会奈良支部 支部長 藤 善 尚 憲 (昭和31年卒教大体育 昭和33年卒教大教育) 〒632-0094 奈良県天理市前裁町310-2 TEL 0743-63-0339	高知茗溪会 会長 下 坂 速 人 (昭和53年卒筑体) 〒781-0314 高知市春野町南ヶ丘4-4-14	茗溪会熊本支部 支部長 秀 島 史 孝 (昭和49年卒教大武) 〒862-0916 熊本市東区佐土原1-18-8 TEL 096-368-6132

あけましておめでとうございます。
 私は、昨年5月24日に一般社団法人茗溪会理事会
 (第一回)におきまして代表理事(理事長)として選
 任されました。
 たいへん困難な時期ではありますが、誠心誠意職
 責を全うする所存であります。しかし、全国の会員、
 代議員の皆さま始め、茗溪会に直接、間接に関係さ
 れる多くの方々のお力添えなくしては、到底この職
 責を全うすることは出来ません。特に、理事・監事
 の皆さまや大学当局の暖かいご理解のもと、ご支援
 ご鞭撻をお願い申し上げます。
 茗溪創基140年、筑波大学開学40年、また、茗溪会
 は、明治15年に同窓の士が結集して誕生し、これま
 た130年の長い歴史と伝統をもつ同窓会であります。
 この茗溪会が新しい法人として生まれ変わり、そ
 の最初の理事長の職を仰せつかった者といたしまし
 ては、ずしりと重い責任を感じるところであります。
 先輩がたが築かれ継承されて来られましたこの同
 窓会を、発展させこそすれ、関係する皆さまがたの
 期待に応えられない方向に進める事だけは回避させ
 ねばならないと固く決意するところであり、いくつ
 しかし、当会と致しましては周知の通り、いくつ
 かの重い課題を抱えております。
 昨年2月、茗溪三法人財務審議会は、新法人発足



一般社団法人 茗溪会
 理事長
 江 田 昌 佑



新年のご挨拶

謹賀新年 平成25年

<p>茗溪会北海道支部</p> <p>支部長 沖野 隼夫 (昭和41年卒教大体育科)</p> <p>TEL 011-521-6016 (北海道事務局)</p>	<p>茗溪会宮城支部</p> <p>支部長 河岸 敏郎 (昭和49年卒教大体育)</p> <p>〒981-3204 仙台市泉区寺岡1-11-12 TEL 022-378-5995 FAX 022-378-5995</p>	<p>茨城茗溪会</p> <p>会長 早川 源一 (昭和51年卒教大東洋史)</p> <p>TEL 029(224)2254 (水戸一高)</p>
<p>一般財団法人 筑波学都資金財団</p> <p>理事長 堀内昭三 (昭和35年卒教大 法政)</p> <p>副理事長 林 史典 (昭和41年卒教大 47年教大院博日文)</p> <p>理事・監事・評議員一同</p>	<p>学校法人 茗溪学園中学校高等学校</p> <p>理事長 西野虎之介 (昭和28年卒 教大農経)</p> <p>校長 柴田 淳 (昭和52年卒教大 昭和56年筑修体)</p> <p>理事・監事・評議員一同</p>	<p>茗溪会埼玉支部</p> <p>支部長 荒井 修二 (昭和25年卒東京高師理科三部)</p> <p>(自宅) 〒339-0005 さいたま市岩槻区東岩槻5-3-12 TEL 048-757-1549</p>
<p>茗溪会千葉支部</p> <p>支部長 秋山 尚功 (昭和38年卒教大東洋史)</p> <p>(自宅) 〒286-0021 成田市土屋892-79 TEL 0476-24-4425</p>	<p>千葉市立千葉高等学校</p> <p>校長 布留川 厚 (昭和52年卒教大)</p> <p>(学校) 〒263-0043 千葉市稲毛区小仲台9-46-1 TEL 043-251-6245 FAX 043-251-8215</p>	<p>千葉県立船橋二和高等学校</p> <p>校長 鈴木 祐弘 (昭和53年卒教大心)</p> <p>(学校) 〒274-0806 千葉県船橋市二和西1-3-1 TEL 047-447-4377 FAX 047-449-6737</p>
<p>千葉県立君津青葉高等学校</p> <p>校長 根本 進 (昭和54年卒筑二農)</p> <p>(学校) 〒292-0454 千葉県君津市青柳48番地 TEL 0439-27-2351 FAX 0439-27-2146</p>	<p>習志野市立習志野高等学校</p> <p>校長 越川 均 (昭和54年卒筑体)</p> <p>(学校) 〒275-0001 千葉県習志野市東習志野1-2-1 TEL 047-472-2148 FAX 047-471-4581</p>	<p>千葉県立生浜高等学校</p> <p>校長 百瀬 明宏 (昭和55年卒筑一人文)</p> <p>(学校) 〒260-0823 千葉市中央区塩田町372 TEL 043-266-4591 FAX 043-264-8636</p>
<p>銚子市立銚子高等学校</p> <p>校長 猿渡 末治 (昭和55年卒筑一自)</p> <p>(学校) 〒288-0814 千葉県銚子市春日台2689 TEL 0479-25-0311 FAX 0479-23-4441</p>	<p>千葉市立稲毛高等学校 千葉市立稲毛高等学校附属中学校</p> <p>校長 山本 昭裕 (昭和55年卒筑体)</p> <p>(学校) 〒261-0003 千葉市美浜区高浜3-1-1 TEL 043-277-4400 FAX 043-279-0565</p>	<p>千葉県立野田中央高等学校</p> <p>校長 渡邊 恭男 (昭和50年卒教大地)</p> <p>(学校) 〒278-0046 千葉県野田市谷津713 TEL 04-7125-4108 FAX 04-7123-7108</p>

順不同・敬称略・P22「本部だより」を参照

に向けて”という答申を理事会に上程致しました。その重点といたしまして、昨今の最大課題となっており、財務に関する諸課題”が提言されております。

その提言にも見られます通り、私どもは財政的に“負のスパイラル”からの脱出を図らねばなりません。そのためには、茗溪会自身、自ら立ち直るための努力と実行力が必要とされております。自助努力が必要なのであります。

即ち、第1点として、財政状況の健全化及びその好転を目指し諸事業等の増収と節減を実行して行かなければなりません。

第2点としては、地域や職域の支部との連携をいままです以上に緊密にしご協力をいただきながら、会員の掘り起こし、会費納入の促進等の諸問題解決を図り、改めて同窓会の公益、共益事業の充実に当たらなければならぬと存じます。

以上の2点は、理事会と致しましても、その運営の基本的方針として共通理解を賜りたいところであり、

一方、事業の基本的な柱と致しましては――

- 1、同窓会としての互助事業の充実
- 2、公益目的事業の充実
- 3、大学への支援の充実―等を実施して参りたいと存じます。

先程もふれました答申にもありますように、増収、節減のキャンペーンや具体策の実施等につきましては、本部事務局をはじめ、理事会内に組織されております各種委員会等では、既に具体策が提示され実施されはじめてはおります。新法人発足を機に、新しい“茗溪会”にとりましては一層の価値を高める好機と捉えて参りたいと考えております。

重ねて、本部理事・監事、全国の代議員や支部長の皆さまを始め、すべての会員の皆さま、関係する皆さまの一層のご理解ご協力のほどをお願い申し上げます。新年のご挨拶とさせていただきます。

教育再生への提言 ～ 高大連携から高大接続へ～

わが国の学校では、いま「いじめ」問題が連日のように新聞やテレビをにぎわしています。学校に行けない不登校の子どもたちの数も相変わらず高い数字を示しています。また、OECDが行う「生徒の学習到達度調査」では、日本の子どもたちの学力の低下が指摘されています。

経済の低迷から高校や大学を卒業しても「就職できない」「やりたい仕事に就けない」という若者も増えていて、その対策もわが国の喫緊の課題です。

今回の特集では、筑波大学副学長の清水一彦さんと茗溪学園理事長の西野虎之介さんに、高大連携の取り組みの実際を紹介していただきながら、混迷するわが国の教育再生に向けた方策を話しあっていただきます。

❖ 話しあう方

筑波大学副学長・理事

清水 一彦 氏

茗溪学園理事長

西野虎之介 氏

“高大連携”の誕生

↓ 高大連携という考え方は、いつごろ、どのような経緯から生まれてきたのでしょうか。

清水 高大連携というのは、大学の大量化あるいは18歳人口の長期減少傾向が引き金になって生まれてきた考え方です。大学がエリート養成であった時代や18歳人口が右肩上がりに増えていた時代には出てこなかった考え方です。

わが国の大学進学率は、1963年（昭和38年）に大学大量化のメルクマール（基準）といわれる15パーセントを超え、現在は大学と短大を合わせると56パーセントになっています。

一方、18歳人口は、1992年（平成4年）をピークにどんどん減ってきています。

そうしますと何が起ころかと言いますと、高校を卒業する生徒の半数以上が大学、短大に進学することになりますから、学力的にも相当なばらつきがあり、しかも多様なニーズを持った生徒が多数、大学に入学してくるということになります。

そのため、大学の教師が高校に向向いて「出前講義」をしたり、大学の授業を受講させて優秀な生徒に入学の動機づけをしたりすることが行われるようになりました。また、学力的にばらつきのある生徒に対しては、リメディアル教育（これは治療教育とか補習教育と訳されています）が始まりました。

西野 私は茨城県の高等学校審議会や高校の同窓会の会長をしていましたので、茗溪学園の取り組みから少し離れて、公立の高校では高大連携の動きをどう受け止めていたかということからお話をしてみたいと思います。

高大連携の大きなきっかけになったのは、清水先生のお話にもありましたが、学力低下の問題があったと思います。

ゆとりある教育をめざすということで、国は200

2年（平成14年）に小学校と中学校、翌2003年（平成15年）に高等学校の学習指導要領を改定し、「学習内容と授業時数の削減」「総合的な学習の時間の新設」「学校週5日制」を実施しましたが、結果としては学力の低下が顕著になってきました。

そういう中で、強い危機感をもった茨城大学の先生が、この方は理系の先生ですが、地元の高校に向向いて、実験のやり方を生徒だけでなく先生たちにも指導してくれました。

また筑波大学の先生からは、科学の基礎教育ができていないことについて、「大学でも日本化学学会でも問題視しているので補習の必要があるのではないか」という指摘があり、双方向型の出前授業が始まりました。

この双方向の出前授業は、例えば大学から「数学の基礎ができていない」という指摘を受けた時には、高校の先生が大学に行つて、「空白になっているところ」や「遅れているところ」の授業を行います。

逆に大学からは専門の先生が高校に向向いて、大学の授業や大学の生活などについての準備教育を行うというやり方です。

こうして高校と大学の連携作業が動きだしたのです。

筑波大学の高大連携の取り組み

↓ 筑波大学は、いま全国の高校を対象に、高大連携活動を積極的に進めているということですが、筑波大学の高大連携についての基本的な考え方や具体的な取り組みについておうかがいしたい。

清水 筑波大学の高大連携活動の方針は二つあります。

一つは、「特定分野に卓越した高校生に、大学レベルの教育機会を提供する」こと。

もう一つは、「多くの高校生に多彩な情報を提供し、日本の将来を担う人材を育成する」ことです。

これは筑波大学の「より優秀な学生を確保したい」という姿勢の表れでもあります。

2006年(平成18年)の「教育基本法の改正」により、大学も社会貢献や研究成果の社会還元が求められるようになり、国民に対する説明責任というかアカウンタビリティが重視されるようになってきました。

そのため、筑波大学も、最初は18歳で受け入れる生徒たちにできるだけきめ細かな指導をしたり、あるいは、いろんな機会に触れさせるといった形で、高連携活動を進めてきましたが、最近では、徐々に優秀な生徒を確保するための取り組みが変わってきています。

もちろん、ここでいう「優秀」というのは単に学力が高ければいいということではありません。私は、学力については、「新しい学力観に基づく学力」というものを考えています。それは別の言葉でいえば「生きる力」です。

この「生きる力」には「知力」や旧来の「学力」が含まれていますが、それだけではなく、例えば、「意志力」とか「何とかしようという行動力」とか「体力」「技術力」「コミュニケーション能力」「マネージメント能力」も含まれています。

つまり、私は、優秀な生徒というのは、単なる知識だけの学力ではなく、総体としての「生きる力」を学んだ生徒と考えているのです。

そういう生徒を確保し、受け入れるために、筑波大学では、先ほど申し上げた基本方針に基づき、高連携のさまざまな取り組みをしています。

では、筑波大学では、高連携活動として、具体的にどんな活動をしているかということですが――

一つ目は、出前講義です。これは筑波大学の教員が全国の高校に向いて講義を行うものです。昨年度は「若い世代のための被災地出前講義」と名付けて、岩手、宮城、福島、茨城の11高校で実施いたしました。

二つ目は、模擬授業です。これは、筑波大学の研究者が専門分野の話を高校生向けにアレンジして授業を行うものです。

三つ目は、研究室体験です。これは筑波大学の研究室やゼミで高校生に最先端の研究に触れてもらう取り

組みで、「未来の科学者養成プロジェクト」の活動もその一つです。

四つ目は、高連携シンポジウムの開催です。これは高連携活動の成果を多くの人に知ってもらうための活動ですが、「筑波大学と地元高校との高連携シンポジウム2012」、「若い世代による地域活性化シンポジウム」、「茗溪学園の個人課題研究の発表会」などの活動を行っています。

そのほか、筑波大学では、高連携活動として、高校教員のための研修も行っています。

しかも、地元の高校はもとより全国の高校からの要請も毎年増えている、昨年度の実施件数は433件に上りました。

茗溪学園の高連携の取り組み

↓茗溪学園は筑波大学の附属学校ではありませんが、設立当初から筑波大学と強い連携を保ちながら、さまざまな教育実践を行っています。茗溪学園と筑波大学の高連携活動の取り組みについて、お話をうかがいたい。

西野 高連携の話に入る前に、まず、茗溪学園の生い立ちからお話をしたいと思います。

東京教育大学が筑波に移転することが決まった時、附属学校の移転の話もありましたが、附属学校の筑波移転は立ち消えになりました。

そのような状況の中で、筑波に進出した研究所の人たちから、中高一貫のいい私立をつくってほしいという要望が高まり、東京高等師範学校をはじめ前身諸学校と東京教育大学の同窓会を母体とした筑波大学の同窓会組織である茗溪会が、百周年の記念事業として、この地に中等教育の学校を設定しようということになりました。

このような経緯で設立された茗溪学園は、最初から筑波大学の准附属的な学校として位置づけられていましたので、筑波大学と茗溪学園の高連携活動は設立

の時から始まっていたといってもいいのではないかと思います。

では、筑波大学と茗溪学園の高連携活動が具体的にどのような進められているかということですが――一つ目は、「筑波大学連携講座」の実施です。これは筑波大学の先生による「出前講義」ですが、放課後の時間帯に希望者を集める形で開催しています。昨年度は、高校2年生を対象に、19人の筑波大学の先生に講義をしていただきました。

二つ目は、「個人課題研究」(十七歳の卒論)に対する筑波大学の協力です。

茗溪学園では、高校2年生の時に「個人課題研究」(十七歳の卒論)に取り組むことになっていますが、これは、生徒一人一人が自分の興味・関心にもとづいて自由にテーマを選び、1年間かけて研究をまとめていくという学習活動です。

そしてこの研究のためには、筑波大学をはじめ多くの大学や研究機関の指導、協力が得られる体制がつけられていて、昨年は、筑波大学からは大学院の学生を生徒の研究の手助けをしてくれるチューターとして派遣してもらいましたし、また他の大学や研究機関の先生からも適切な指導、助言を受けることができました。

1年間かけて一つのテーマにとりくむ「個人課題研究」は、生徒たちにとっても貴重な体験となつていくようで、この研究がきっかけとなつて、その後の自分の進路を決めていくという生徒も数多く出ています。

そして三つ目は、



高校生への研修講習



清水一彦氏

筑波大学副学長・理事

清水氏は昭和49年教大教育学部卒。昭和51年院修教卒。昭和55年筑波教5年修了。教育学者。教育審議会等で教育制度改革を唱える。

筑波大学の大学会館で行う個人課題研究の発表会です。この発表会は2008年度(平成20年度)から始まりましたが、毎回、筑波大学の先生方にも多数参加していただき、適切な指導、助言をいただいています。

混乱するわが国の教育課題への提言

↓これまで、筑波大学と茗溪学園の高大連携の取り組みについてお話をうかがってきましたが、それらの諸活動は、混乱するわが国の教育課題を解決するための鍵になるのでしょうか。それとも別の手だてが必要になってきているのでしょうか。

清水 我が国の大きな教育課題である「いじめ」や「不登校」についてですが、私はその原因は日本の教育制度が関係していると考えています。

具体的にお話しますと、日本の「いじめ」の件数は中学1年がピークで、あとは下り気味ですが、欧米先進国では高校レベルまで右肩上がりに増えています。ところが「不登校」の件数は、日本でも「いじめ」の場合とは違って、高校段階まで学年があがるごとに増えていくという実態があります。

私はそこに注目して、「いじめ」と「不登校」は必ず相関があると考え、「いじめ」を減らせば「不登校」も減るという仮説を立てました。そして、5年ほど前に、6000人くらいの子ども・教師・校長を対象にアン

ケート調査をしたのですが、両者には強い相関関係があるという結果が出ました。

では「いじめ」や「不登校」を減らしていくためにはどうしたらいいかということですが、結論から言うと、私は「6・3・3・4の教育制度を変えることだ」と考えています。このことについては、のちほどお話ししたいと思います。

西野 いま清水先生から「いじめ」や「不登校」の原因のお話がありました。高校での問題は、はじめは、「校内暴力」でした。

「生徒がバイクで校庭をぐるぐる走り回る」「教室に入ってきて授業を妨害する」というようなことがあって、ひどい学校では警察が関与するような状況も起り、学級崩壊とも言われましたが、これは関係者の取り組みで何とかおさまりました。

そして次に出てきたのが「いじめ」の問題です。ただ、「いじめ」の問題で私が基本的なところからわからないのは、世間一般では「いじめ」を「陰湿で卑劣極まりない行為」と受けとめているのに、「いじめ」をしている生徒たちには加害者意識が少ない、あれは遊びだと思っていたという感覚なんですね。学校は面白くないが「いじめ」は面白いから学校へ行くんだという話を聞いたことがあります。

「いじめ」については、清水先生のおっしゃるように制度の改革ももちろん大切だと思いますが、もっと深いところで、子どもたちの心の問題として考えていく必要があるのではないかと考えています。

清水 高校では「いじめ」の前に「校内暴力」があったというの、その通りだと思います。そして、その「校内暴力」も教師に向かっていたという実態がありました。

ところが、1984年から1994年の10年間は「校内暴力」は増えなかった。学校に校内暴力がない「平和な10年」と言われていますが、実は、この時代は、学校の管理主義が強化された時代だったので。

警察の指導もあり、先生たちも強い姿勢で校内暴力に立ち向かうようになり、生徒たちも手が出せない状

況がつくられていったのです。

↓校内暴力にかわって、いま、教育現場を悩ませているのは「いじめ」や「不登校」の問題です。そしてこの問題の解決のために、清水先生は「6・3・3・4の教育制度を変える必要がある」という考えを示されました。なぜそう考えるのでしょうか。

清水 日本の「6・3・3・4の教育制度」ができたのは1947年(昭和22年)で、すでに65年が過ぎました。

だから私は、65年も続いているわが国の教育制度はすでに制度疲労を起こしていて、それが原因で「いじめ」や「不登校」の問題も起こっていると考えています。

先ほど、「いじめ」の発件数は中学1年がピークだと申し上げましたが、中学1年は小学校6年と中学校3年の区切りになっていて、ここの接続がうまくいってない。

中学校では学級担任制から教科担任制に変わります。教育内容も難しくなる。学校の規則も厳しくなる。さらに社会の受けとめかたも、中学生は、大人の仲間入り」という目で見られるようになる。そして情緒的な発達の面でも



個人課題研究発表(於 筑波大)



西野虎之介氏

茗溪学園理事長

西野氏は昭和28年教大農学部農経卒。常陽銀行頭取、会長を勤めた地元経済界の重鎮。社団法人茗溪会理事長を経て現在に至る。

思春期に入りますから、子どもたちにとっては、こうした変化が大きなプレッシャーになって、この時期に「いじめ」がピークになるのではないかと考えています。

だから、この問題を解決するためにも制度を変える必要があるのです。

↓現在の日本の教育制度は65年も続いていて、国民にとってはなじみ深い制度になっています。いったいどのような制度に変えていけばいいのでしょうか。

清水 制度を変えるというのは、単に区切りを変えればいいということではありません。区切りを変えると同時に教育内容も教育方法も、そして制度の運営の仕方も変えていかなければなりません。

結論論的かというと、私は高校までの普通教育は、「小学校は5年、中学校は3年、高校は4年」がいいと考えています。そして、中学校には小学校と高校を橋渡しする中間的な性格をもたせ、教育内容も教育方法も徐々に変わっていくというようにしたい。そして、そういう制度につなげて、高校と大学をどう接続させていくかということが次の課題になってくるのです。

単線型の学校制度は、一見つながっているように見えるのですが、実はそこには「学ぶことの急激な変化」とか「教育内容の無駄」などがいっぱいあります。

高校と大学の関係でも、高校生が大学に入ってから高校時代に習ったことをまた習うということがよくありますが、これも接続がないから起こることなのです。

↓高校と大学は、いま、さまざまな高大連携活動を進めていて、かつてと比べると、かなり接続しているように見えますが……。

清水 いまの制度では、小学校から高校までは普通教育ということにつながっていますが、大学は学術研究の場という位置づけですから、高校までの普通教育と大学は法的には接続関係にはなっていません。しかし、いまは高校生の半数以上が大学、短大に進学していますから、実態としてはつながっています。

そして大学も、主に高校卒業生をターゲットに学生の募集をしていますから、高校と大学はもつと緊密な接続関係をもつ必要が生まれてきたのです。

だから私は、高校と大学は、高大連携にとどまらず、「高大接続」「高大一貫」に向かうのが理想ではないかと考えているのです。

西野 「高大接続」「高大一貫」を目指すためには「生徒をふるいにかけている入試制度をどうするか」ということが鍵になってくるのではないかと思います……。

清水 確かに、日本の高校と大学をつないでいるのは、これまでは入試でした。入試という「点」でしかつながっていないかった。これを「線」や「面」での接続に変えていかなければならないと思うのです。

アメリカでは、すでに、高校と大学の関係は「高大連携」ではなく「高大接続」「高大一貫」という考え方でとらえられていて、高校と大学はカリキュラムや履修の面でつながっています。

一例をあげますと、ミネソタ州では、州の規定で、ハイスクールの生徒は、(在学していない同年齢層も含めて)3年次・4年次(相当)の時に、州内の大学で、テキストも貸与されて、無償で授業を受けることが保障されています。

そして、大学で受けた授業は、ハイスクールの単位

になりますし、その生徒が大学に進学すれば、大学の単位にもなるという制度になっているのです。

西野 アメリカの高校と大学の関係は、日本の高大連携よりも相当先を行っているようにです

が、日本でも進学校などでは高大連携の内容が当初と少し変わってきているように思います。

医学部を志望する高校生たちから、「もつと自分の進路に関する講義をしてほしい」という要望が強くなり、筑波大学と東北大学の医学部の先生に専門の話をしてもらおう取り組みが始まりました。

そして、医学部以外を希望する高校生たちからも、自分の進路選択に役に立つ授業を受けたいという声が高まり、それではということ、高校でも教科担当がカリキュラムを編成し、それぞれの教科に関係のある大学の先生に来てもらって、模擬授業をしてみようというように変わってきています。

そういう意味では、「出前講義」や「模擬授業」も、かつてのような、専門の研究者から一般的な話を聞くというやり方から、大学に進学する前の予備教育と教員研修の場が変わってきているということが言えるかもしれません。

それから、先ほど清水先生から、アメリカの高校と大学が単位を共有しているというお話がありました。実は茨城大学でも美術の彫塑の授業を受けるとそれが



筑波大学

高校の単位にもなるという試みが、テスト段階ではありませんが始まりました。これは、高大連携の一步進んだ形ではないでしょうか。

清水 そのとおりですね。茨城大学の試みも、「高大接続」に向かった取り組みとして大事に育てていく必要があるのではないかと思います。

高大連携から高大接続そして高大一貫へ

↓茨城大学の試みは「高大連携」から「高大接続」そして「高大一貫」への第一歩なのかもしれません。

でも、いまの日本の教育制度のもとでは、まだ「高大連携」を手がかりに、高校と大学の結びつきをより深めていくという取り組みが必要なのではないのでしょうか。

清水 日本の教育政策の上で「接続」という言葉が取り上げられたのは、1999年（平成11年）の中教審答申です。そして、昨年の8月には中教審の中に「高大接続の特別部会」が設置され、わが国もようやく「高大連携」から「高大接続」へ動き出しました。

そして「高大接続」に向かうときに課題になっているのは、高校と大学がこれまでのように入試という「点」でつながるのではなく、「線」あるいは「面」でつながる必要があるということです。

つまり、カリキュラムや教育内容や教え方を接続させなければなりませんし、また高校の先生が大学で教えたり大学の先生が高校で教えたりするという教員の交流まで含めた接続が必要になってくるのです。

「高大接続」というのは、学ぶ者がスムーズに移行できるというのがねらいですから、学ぶ者の学習権の保障ということでもあります。

だから私は、日本の教育制度も「高大連携」から「高大接続」「高大一貫」に向かう大きな流れができてきたことをうれしく思いますし、この流れをもっと加速させる必要があるのではないかと考えています。

高校・大学の抱えるもう一つの課題

↓いま、わが国の教育現場のもう一つの課題は、高校や大学を卒業しても、「就職できない」「やりたい仕事に就けない」という若者が増えていることです。

経済界のリーダーでもある西野さんはこの問題については、どのように受けとめているのでしょうか。

西野 この問題は、わが国の経済が低迷しているということも原因の一つになっているとは思いますが、私はそれ以上に、大学の大量化が大きく関係していると考えています。

いま大学を卒業する学生の数は、毎年50万人を超えています。しかし大企業に就職できるのは15万人程度です。これに就職に就く学生や公務員になる学生そして大学院に進む学生を加えても六割くらいにしかならない。

そうしますと、必然的に20万人くらいは、中堅・中小の企業やベンチャービジネスに入るか、あるいはニートになるしかない。

こういう状況の中で、大学は多くの学生を社会に送り出すわけですから、大衆化時代の大学、特に文系学部では、進路選択のための教育にもっと力を入れていく必要性が高まっていると考えています。

海外に出ても活躍できる人材を育てるためには、外国語の教育も、またリーダーシップを育てる教育も、もっと実践的なものに変わらなければならないでしょう。

そしてそれ以上に、私が大学や若い人たちに望んでいることは、「もっと第一次産業や第二次産業を目指す若者が増えてほしい」ということです。

いまの若者は、第三次産業の方にばかり目が行っているように思われます。「国の根幹を支える第一次産業や第二次産業を、若い力で現代的な産業に生まれ変わ

わらせてほしい」、「大学はそのための教育にも力を入れてほしい」そのような願いが多く聞かれます。清水 大学の大量化の中で、毎年50万人もの学生が社会に送りだされていくという現実の中では、西野さんのおっしゃるような高校でも大学でも、もっと進路選択を視野に入れたカリキュラムを作っていく必要があるだろうと思います。

私は、筑波大学の高大連携の説明をした時に、筑波大学は入学してくる学生に「生きる力」を求めているという話をしましたが、西野さんが求めているものもこの「生きる力」の教育ではないかと思っています。

そしてこの「生きる力」の教育のために、1984年（昭和59年）に設置された「臨時教育審議会」で、「生涯学習社会への移行が必要である」という答申がなされました。

この生涯学習社会というのは、「3つの学び」からなりたっていて、一つは、小学校・中学校・高校では「生きる力を学ぶ」、大学や社会では「生き方を学ぶ」、そして仕事から離れたファイナルステージでは「生きがい学ぶ」という考え方です。

グローバル化が進んでいる今日のような社会では、高校でも大学でも、これからはますます「生きる力」の教育と「生き方」の教育が重要になってきているのではないのでしょうか。

↓今日は、お忙しいお二人から、わが国の教育現場が抱えているさまざまな課題に対する貴重なご提言をいただき、ありがとうございました。



茗溪学園だより

日本文化探究 中学三年国内研修

「世界的日本人の育成」を掲げる本校では、日本文化を理解し世界に紹介できる力を涵養するため、日本文化探究の機会として「国内研修旅行」を組み込んでいます。

この旅行は、昨年12月初旬に4泊5日の日程で広島・京都を研修地として行いますが、事前の学習活動は10月から本格化します。6〜7人で班を編成し、班ごとに調査テーマを設定します。事前学習は、図書館などの文献調査、その後その学習内容および京都における調査・行動計画について、先生方のヒアリングを受けます。

ここでは、いわゆるダメ出しが行われて、学習内容を深め現地調査活動を充実させていきます。生徒達は、どんなテーマにするか相談を重ね、先輩たちの残した報告書を参考にしながらテーマを決めていきます。いくつか紹介しますと、七宝焼き、五山送り火、平安から室町時代の建造物、庭園、京野菜、茶道、和菓子、日本刀、浄土信仰など、その分野は多岐にわたります。

これらの事前学習やヒアリングは、学年全員が1週間寮に宿泊し、夜の時間を使って集中的に行います。また、日本文化の底流にある仏教についても体験的な学びをします。内容は、講演会と坐禅体験ですが、今年度の講演会は、「意外に

身近な仏教の知恵」という題で、本校卒業生に講師をお願いしました。講演の後には夕食を摂って柔道場に集まり、坐禅体験です。本番の研修旅行で



ヒアリング：しっかりとした計画がないとやり直し



坐禅体験（校内・柔道場にて）



テーマ研修：賀茂別雷神社の屋根修復現場で神社の屋根のふき方を学ぶ



ARISS 交信：「宇宙飛行士になるために中高生が身に着けておくことは」の質問に「チャレンジ精神と仲間をいっぱい作って」と星出さん



64対10のスコアで優勝し、3年ぶりの花園出場を決めて喜ぶ選手たち

は、比叡山延暦寺に宿泊して坐禅を含む仏教体験をします。その練習ともいえます。丁寧な解説を交えながら、厳しい指導をしていただいています。

旅行から帰ると、レポート作成があり、さらに締めくくりにテーマ研修報告会(パワーポイントを使ったプレゼン)と続きます。時間厳守、締切厳守という指導方針のもと、生徒達は忙しい期間を過ごしますが、内容充実の研修となっています。

星出宇宙飛行士と無線交信

ARISSスクールコンタクト

科学部無線工学班、国際宇宙ステーション滞在中の星出彰彦さんとの無線交信に成功

ARISS(=Amateur Radio on the International Space Station) スクールコンタクトとは、NASA(米航空宇宙局)の教育プログラムの一つで、国際宇宙ステーション(ISS)に滞在する宇宙飛行士と、アマチュア無線の資格を持つ生徒たちとが交信を行うものです。本校無線工学班の生徒26名と星出さんとの交信は、平成24年10月23日午後8時から約10分間でした。この10分間で26名全員が質問するために、リハーサルを繰り返して、保護者や教職員、報道関係者の見守る中、予定通り全員が質問をすることができました。星出さんからは、「茗溪学園時代の寮生活が役立った」と、中高時代に仲間への気遣いなどを学んだことがISS滞在に生かされ

ていると、在校生を励ますことばをいただきました。

高校ラグビー花園出場3年ぶり18回目

第92回全国高校ラグビー大会茨城県予選を危なげなく勝ち抜き、18回目の花園出場を決めました。平成22年、23年と優勝候補と目されながら、決勝で苦杯をなめさせられていただけに、3年ぶりの優勝には喜びと共に安堵感も入り混じる試合となりました。

今年のチームは、春の全国選抜大会ベスト8の実績もあり、もう一つ上の準決勝以上への進出など、期待は大きく膨らみます。積極的に大きく展開するプレースタイルは、本校が創部以来追い求めてきたラグビースタイルですが、フォワード戦を基調に手堅く勝ち上がりながら、チームの多い中、茗溪ラグビーがどこまで通じるか、大いなるチャレンジとなります。現在は、大会に向けて念入りの調整をしているところです。

中学ラグビー部も、12月22・24日の東日本大会準決勝決勝戦(秩父宮ラグビー場)に向け練習に励みました。さらに、12月29・31日には、高校ラグビーの聖地花園ラグビー場で行われる全国ジュニア大会にも、茨城選抜(ほとんどが本校部員で単独チームに近い)として出場します。

筑波大学ラグビー部の活躍と合わせて筑波・茗溪フアミリーでラグビー界の話題を独占したいと思えます。

ゆめ 翔る



筑波大学の卒業生は、すでに社会の第一線で活躍しています。同窓生たちが、学生時代以来の夢を実現しようと、それぞれの仕事の現場で頑張っている姿を紹介し、新年らしく「夢」をもって「翔る」というテーマで、特集することと致しました。OBたちはいまでのような課題に立ち向かっているか、仕事の内容を紹介していただき、その仕事を始めるに至ったきっかけや、その仕事の将来の可能性とか、社会への貢献とか、夢を語っていただきました。

(写真は、国立科学博物館の展示室「発見の森」の全景)

サイエンスコミュニケーション



小川 義和 (57筑二生)

国立科学博物館学習企画調整課長・筑波大学各員教授

科学博物館で体験型展示「発見の森」を手がけた。歴史、美術、自然に対する興味・関心、想像力をかき立てるようなサイエンスコミュニケーションをめざす。

「科学は論理と想像力の融合である」サイエンスを発行しているアメリカ科学振興協会は、次のハレー彗星飛来への2061年までの科学教育の目標を立てています。そのScience for All Americans(1990)の本に、この表現が出てきます。不思議に思って想像するとともに論理的に推論し、検証してみると、その繰り返しが、科学という知識体系を作ってきました。私が勤める国立科学博物館(以下、科博と表記)ではサイエンスコミュニケーション養成講座を展開しておりますが、受講する学生にこの言葉を伝えております。サイエンスコミュニケーション(以下、SCと表記)には、

自らの視点を移動し、受け手の立場を理解できる想像力や論理的に突っ込みを入れる力が必要です。これは科学に限ったことではなく、普段の仕事も想像力と他人を説得する論理が必要だと思えます。振り返ってみると、科博の体験型展示室「発見の森」は10年ほど前に私がデザインしたものです。展示と教育活動を結びつける初めての取り組みで、大変苦労しました。地中に潜って顔を出して観察できたり、土を引き出してその断面を観察したりできます。雑木林の朝焼けや夕

焼けを展示室で表現するために、実際の雑木林で夜から朝までに光や音を取材したりしました。この展示室のコンセプトは私の幼少期の体験をもとに想像力を働かせてつくりました。現在は、科博の教育活動の企画調整と全国の科学系博物館の教育活動のネットワーク構築を担当しております。具体的には来館者の科学リテラシーを高める教育活動の企画、それを担うボランティアやサイエンスコミュニケーションの養成・研修や活躍の場の創出、全国の科学系博物館の学芸員や教員の研修、学校との連携による児童生徒への教育活動の展開等です。

さてSCというと、講演会やサイエンスカフェを開催し、科学をわかりやすく伝える活動と思われがちですが、それだけではありません。科学に関する多様な意見を踏まえた合意形成を図り、協働して課題を解決していくための活動です。それは、科学の健全な発展とその成果の有効活用を促す活動でもあります。私は、SCの教育的研究のために大学院に入学し、45歳で博士を取得しました。当時博物館の科学教育研究は我が国ではほとんど手つかずで、米国の先行事例が参考になりました。特に大学院入学直前の1999年〜2000年にアメリカ自然史博物館(AMNH)でインターンの機会を得ることができ、そこでの経験と知見が教育研究に役立ちました。いささか年を取ってからの勉強で、しかも勤務しながらの夜間大学院は大変でしたが、博士論文で構想したことは、現在の科博の教育活動として実現できました。例えば、院終了後、科博でサイエンスコミュニケーションの理論的研究を行い、大学と連携したサイエンスコミュニケーション養成講座を開発しました。科博は筑波大学と連携協定を結び、本講座を修了した筑波大生は大学院共通科目の単位が取得できるようになっております。これもAMNHと近隣の大学と連携による単位修得の仕組みを参考にしております。

これからは、博物館による地域のSCの振興や文化の創造が課題です。博物館は歴史、美術、自然等に関する資料を収集し、保管し、関連する調査研究を行い、それを展示・公開することで、一般の人々の学びを支援しています。博物館には、学校にはない標本、資料等があ

り、訪れた人々がその大きさ、形、雰囲気や学芸員の生き方に感動し、歴史、美術、自然に対する興味・関心を高め、想像力をかき立てることが出来ます。しかし博物館には学芸員が十分でなく、教員も忙しく、標本資料が教育活動に十分活用されていとは言えません。学校において博物館を活用するためには、教員が自ら博物館に親しみ、博物館を楽しむ体験が必要です。そこで教員自身が自発的に博物館を楽しみ、博物館に対する理解を深める機会として「教員のための博物館の日」を、4年前に科博で始めました。本年度は6都道府県まで広がり、来年度はさらに地域を広げていきたいと思っています。

原子力発電の課題にみられるように、現代社会における科学や技術をめぐる課題は複雑で、その解決には多様な専門家がが必要です。地域社会で様々な役割を果たしている人々が対話し、主体的に課題を解決していくこと、それは、課題に対し、人々が自立的に判断し、対話を通じて、合意形成し、協働して解決していく社会の実現の過程でもあります。博物館が地域文化の拠点となり、全国いたるところでSCが展開され、一人ひとりが科学や技術を有効に活用して日常生活を豊かに営むようになることを目標にしています。

サンゴ礁を破壊しない開発



沖縄などの港湾建設で、サンゴ礁を破壊しない工法、サンゴが増えるような工法を調査・開発する。「成長の限界」の中で技術開発をめざす。

山本 秀一 (54筑二生56筑修環)

(株)エコー 技術本部技師長

ローマクラブの「成長の限界」が1972年に出版されました。私が筑波大学第二学群生物学類に一期生として入学したのが1975年です。環境の問題はローカルな公害問題から地球規模の問題へと変わりつつある時代

で、「人類に未来はあるのか?」と漠然と考えていました。

筑波大学大学院の環境科学研究科を1981年に修了し、海岸や港湾のテトラポッドを作っている日本テトラポッド株式会社に入社しました。この会社は技術者の90%以上が工学系出身の会社です。工学と理学はもの考え方が対極にある学問のように思いますが、そのような環境にいたことは幸せでした。今は当社の建設コンサルタント事業部門が独立した株式会社エコーに所属しています。エコーでは環境アセスメントに始まって、沿岸域開発と環境保全とのバランスを取るための環境工学的な取り組みに関する業務を担当しています。

例えば、沖縄で港を作ろうとするとサンゴ礁を破壊します。沖縄は離島ですから人や物の移動に港は必要です。そのため、できるだけサンゴ礁を破壊しないような工法とか、サンゴが増えるような工法を調査・開発・提案することが必要になります。幸い、サンゴは自然地形だけでなく、防波堤でも成長してくれます。1990年に、那覇港の防波堤のテトラポッドの上に沢山のサンゴが成長しているのを見つけて、その成長の過程、環境因子との関係の調査やサンゴを増やすための技術開発を担当することができました。2003年には一連の成果を筑波大学大学院の昼夜開講制による研究者リフレッシュ教育制度を利用して博士課程生命環境科学研究科で学位論文としてとりまとめることができました。昼は会社で仕事をしたり夜や休みの日には大学院の学生としてゼミに出たり論文を読んだり書いたりする生活は大変でしたが刺激的でした。それらのご縁もあり、最近では日本最南端の沖ノ鳥島のサンゴを増やすという仕事にも携わらせていただいています。

しかし、サンゴは地球規模の環境変動の影響で世界のサンゴ礁のうち55%が危機的な状況にあるといわれています。



筑波大学の海洋研究会とマリンドIVINGクラブ(TMDC)に所属していた頃

ます(日本サンゴ礁学会・2011)。環境変動の問題の原因は人口増加で、世界の人口は2011年に70億人を超えました。いよいよ「成長の限界」のシミュレーションの分岐点に近づいています。地球上の人とその家畜(牛、馬、豚、羊、鶏)の体重を足し合わせると、陸上動物の全ての重さの2分の1近くになるのだそうです(高橋・2002)。それほど人類の地球環境への影響力が大きくなっているということです。有限の環境の中で人類に未来はあるのでしょうか?成長の限界は超えてはいけない領域で、そうならないようにするために、できるだけ環境負荷を小さくする努力や、開発と保全とのバランスを取るための技術開発が必要です。とても個人の微力ではどうしようもないところです。

一方、私事ですが2012年には初孫を授かりまして、人口増加に寄与することになりました。私達の孫の世代が「ゆめ翔る」ことができる少しでも明るい世の中になりますように、皆様と手を携えて考えていきたいと思えます。よろしく願い申し上げます。

※日本サンゴ礁学会(2011)『サンゴ礁学』東海大学出版会

※高橋正征(2002)『新しい「生態学」(株)バイオシテイ

浮世絵と江戸文化の魅力



日本人の原点ともいえる江戸文化、とりわけ浮世絵の魅力を、効果的にわかりやすく伝えることで、日本人の自信や誇りにつなげたい。

渡邊 晃 (12筑芸18筑博芸)

太田記念美術館 主任学芸員

私は2005年に筑波大学大学院博士課程を修了し、筑波大学大学院の特別研究員、八潮市立資料館での勤務を経て、2007年より太田記念美術館で学芸員として



働いています。学芸員という、美術展の会場で椅子に座って監視をしている人ですか、と聞かれる

ことも多いのですが、実際には学芸員の仕事は、美術館や博物館で行われる展覧会を企画するとともに、館の所蔵するコレクションを管理し、調査研究することが中心となります。その他にも、図録に論文や解説を書いたり、会場での展示作業に携わったり、他の美術館やコレクターの方と作品借用の交渉をしたり、一般のお客様に向けてギャラリートークを開いたり、その仕事は幅広いものです。また、時には執筆などで館外での仕事を受けることもあり、現在は国立劇場の歌舞伎公演プログラムで江戸時代の役者絵を紹介する文章を定期的に担当しています。

太田記念美術館は原宿にある浮世絵専門の美術館で、元東邦生命保険会長であった五代太田清藏が半世紀に渡って収集した1万2千点以上にのぼる世界でも有数の浮世絵コレクションを所蔵しています。年に8〜9回程度の企画展を開催しており、毎回上記のようなさまざまな仕事をこなしながら展覧会を形にしていきます。

私は幼い頃から絵を描いたり、展覧会を見たりするのが好きで、また文章を書くことも好きでしたので、高校の頃、大学に入ったら美術史を専攻して美術館などに勤めたいと思うようになりました。筑波大学の芸術専門学群に入學し、美術史を勉強するなかで、浮世絵の魅力に気づき、以降大学院を経て、現在に至るまで浮世絵の研究

究を続けています。大学時代からずっと指導頂いたのが守屋正彦教授で、研究の方法、論文の書き方はもちろん、筑波大学附属図書館などで開催された展覧会や、茨城県内の文化財調査などにも研究室で関わり、研究者や学芸員としての基本的な姿勢や、チームでの仕事の進め方など多くの事を学びました。現在でも、守屋ゼミで培った経験や、先生の言葉を日々思い出しながら仕事に励んでいます。

いまの職に就いて、浮世絵を含む江戸の文化を勉強する中で、江戸時代の文化的な枠組みがいかに優れていたかを日々感じています。北斎や広重などの絵師が下絵を描き、職人の高度な彫・摺によって生み出された浮世絵が、現代の価格に換算して数百円程度から売られ、中には40万8千枚売れたという記録の残る大ヒット作も生まれました。浮世絵以外にも、安価な席なら2千円ほどの金額で見られた歌舞伎や、その上演ごとに出された役者絵、最盛期には数百軒あったと言われる寄席、今で言えばレンタルビデオに当たる貸本屋など、当時の江戸は想像以上に娯楽に溢れ、庶民がそれを楽しむ極めて高度な文化がありました。今の日本は政治的にも文化的にも混乱の状態にあると思いますが、江戸時代の日本人が持っていた遺伝子は現代にも伝わっていると思いますし、これから日本が元氣を取り戻すヒントが、江戸の文化に数多く隠されている気がします。

いま、仕事を通じて一番やって行きたいことは、特に若い人たちに向けて、日本人の原点とも言える江戸時代の素晴らしい文化や、浮世絵の魅力について知ってもらい、これからの日本を支えていく自信や誇りにつなげてもらうことです。どうしたら浮世絵や江戸文化の魅力を効果的に、わかりやすく伝えることが出来るのか、それが美術館としての現在の一番の課題です。最近ではTwitterなどを通じてインターネットでの情報発信にも力を入れています。何が効果的なのかについては日々館内で議論があります。また一般に向けての働きかけの一方で、研究機関としても高い水準を目指すことも重要であり、今後は両者をバランスよく両立させ、美術館としてのより良い有り方を模索していきたいと思っています。



写真上 太田記念美術館外観
写真下 今年2月開催予定の展覧会「幕末・明治の美女たち」のポスター



自然界の生物に学ぶ物づくりにを提唱して、環境・福祉対応の商品や施設、地域開発を行っている。生物生態系の循環に寄り添ったデザインに夢をはせる。

赤池 学 (56 筑 2 生)

(株)ユニバーサルデザイン総合研究所長

私はかつて筑波大学第二学群生物学類に籍を置き、筑波大学菅平高原実験センターを拠点に、発生学をベースとした昆虫の系統進化を研究していました。しかし、大学院の時代に、昆虫の形態形成を解き明かすためには、高度な非線形物理学や波動理論の学びが必要であることに気付きます。さらに、大学院の時代に学生結婚をし、すぐさま長女も生まれました。何を生業にして生きていくのかを悩んだ末に、辿り着いたのが、幼い頃から好きだった美術とデザインだったのです。

顕微鏡の中で日々刻々とその姿を変えていく昆虫の胚子。そこには、未知の驚きを伴うダイナミックなメカニズムとともに、自然界の合理性がたたえられていました。エネルギーを使わない常温、常圧で、しかも材料は身近な軽元素で、驚くべきものづくりを生物は形にしています。そうした生物のデザインを、人工物に展開するノウハウを確立できないかと考え、生物学から工学設計や美学の研究へと専攻を変え、現在は商品や施設、地域開発を手掛けるインダストリアルデザイナーとして活動しています。

バブルの時代には、山口百恵夫妻が購入した億ションや高級リゾートの設計に関わり、若手ベンチャーの経営者としてメディアに登場したこともありです。しかし、儲けることに楽しみを覚え、会社を暮らし、たまに家に帰るといふ生活をしていた30代前半のことです。まず、父が脳出血で半身不随となり、翌年、妻が悪性ガンの末

期であることが発覚し、6歳の長女と2歳の長男を残して、闘病半年で亡くなってしまいました。

障害者や闘病者、そして幼い子供たちとの苦しい関わりを経験した私を救ってくれたのが、「ユニバーサルデザイン」の提唱者、ロナルド・メイイス先生でした。氏からみんなのためのデザイン手法を学び、現在のデザインシンクタンクを経営するようになったのです。

障害者、高齢者、そして健常者。みんなが使いやすい家電製品や携帯電話、自動車や住宅の設計に数多く関わってきました。そしてある時、社会の最弱者は子供たちであることに気付きます。「子供目線」「子供基準」で安心、安全な、そして創造性を育む「キッズデザイン」の大切さを提起したのです。なぜなら、弱者である子供たちが使いやすい製品は、障害者や高齢者にとっても使いやすい製品になるからです。

さらに、子供目線を突き詰めていくと、まだ見ぬ未来の子孫たちへの思いやりに行き着きます。キッズデザインは、次世代に向けた持続性を形にする「サステイナブルデザイン」に拡がっていくのです。そして、その時、何が求められるべきなのかを深く考えた時、私は改めて、「生物を活かし、生物に学ぶデザイン」の大切さに辿り着いたのです。

私は、「生物に学ぶものづくり」には、「生物の生産物や生産プロセスを活用する」「生物のシステムを模倣・応用する」「生物のデザイン思想に着想を得る」「生物生態系の循環に寄り添う」という、四つのデザインが存在すると考えています。生物の生産物を活用



カイコの繭糸には、紫外線遮蔽性や脂肪吸着性などの多様な機能がある。写真はシルクタンパクを配合した美容液「RE SILK」

した事例には、カイコの繭の機能性を生かしたシルクタンパク製品(写真)、オイル生産微生物によるバイオ燃料生産、ヤマユガの休眠ホルモンを用いた抗がん剤開発などがあり、生物のシステムを模倣した事例には、蓮の葉にヒントを得た超撥水技術、昆虫の翅の構造色に学んだ塗装技術、カタツムリの殻を模倣した防汚技術などがあります。生物のデザインに着想を得たものづくりとしては、昆虫の神経機構を応用したロボテクスモビリティ、オジギソウにヒントを得た内視鏡、シロアリのアリ塚に学んだエコハウスなどが挙げられるでしょう。

しかし、これから最も大切なのは、生物生態系や生物多様性に配慮したデザインだと考えています。それは、米飼料、養鶏、鶏糞、米栽培を循環させる「玄米たまご生産」、多自然のメカニズムに配慮した「近自然工法によるまちづくり」、菜園・坪庭をシステム化したエコハウス、間伐材の木質チップを活用したナノカーボン生産など、自然の循環に寄り添うものづくりやまちづくりです。

ヒト以外の生物の生理、生態、品種、遺伝子の研究知見は、地道ながら日本には豊富な蓄積があります。あるいは、昆虫をはじめとする未利用の生物資源も、日本を中心としたアジアの固有資源です。石油資源と水資源の危機が叫ばれる21世紀において、再生可能な生物資源の知的活用を促す「生物に学ぶものづくり」は、地球社会システムを持続させるためにも、日本がその技術開発のリーダーとなるべき戦略領域だと私は考えています。

茗溪会の顕彰《茗溪賞》

本年度の茗溪会顕彰は、11月26日に東京・茗溪会館で顕彰式と祝賀会を行いました。一般社団法人となった茗溪会は、引きつづき地域社会で広く社会に貢献している青少年や一般社会人を顕彰する公益事業を行います。茗溪会顕彰選考委員会により、全国から7団体と個人4人および筑波大学大学院生が今年の顕彰対象となりました。（大学院生の顕彰式は3月）。

《茗溪賞》として顕彰状を授与した茗溪会江田昌佑理事長は、「全国津々浦々で行われている皆さんの社会貢献活動こそが、日本人の生活文化の基盤となっている」と述べました。また、審査委員で来賓の門脇邦彦さんは、「一切衆生皆仏なり、みんな一緒に仲良くしていこうよ、そのような心でお仕事をなさっている」と受賞者を讃えました。受賞者代表のスピーチで、日和吟社の高橋さんは、「栄える受賞に誉れも高く 澄んだ心の歌の花」と俚謡をうたい喜びを語りました。次いで各団体・個人の受賞者から、それぞれ活動内容の紹介があり、お互いに励まし合う交流の場となりました。



顕彰状《茗溪賞》を手渡す江田理事長（右）



日和吟社の催し



H S C a T の猫保護活動



平塚パワーズの防災訓練



ウォーターポロクラブの水球指導



チームSAKURAの老人訪問

受賞者紹介

（順不同・敬称略）

団体

日和吟社

（代表 高橋 寿一） 茨城県

茨城県美浦村の80年以上にわたって伝わる伝統芸能として、日常生活等の喜怒哀楽を26文字で綴る「正調俚謡」を守りながら次世代に継承している。俚謡とは民謡のことで、庶民が喜びや悲しみを口ずさんだ歌である。

H S C a T

（代表学生 鈴木咲希子） 茨城県

犬、猫などの小動物を手に余って捨てる人が多い中で、筑波大学の構内で獣医師が不妊手術等を行った猫などにシフト制で餌や水を与え、また排泄物の始末等を行っている。学生達の活動は命の大切さを身にしみて感じる体験学習にもなり、また構内の環境整備にも役立っている。（Humane Society-Cat's assistance in Tsukuba）

女性防災クラブ

平塚パワーズ

（代表 菅野由美子） 神奈川県

平成7年の阪神淡路大震災をきっかけに発足した女性

チームで、防災訓練や啓発などに取り組み、災害時に備えている。一方で、一人暮らしの女性の安全のために種々力を尽くしている。全国でも珍しい女性だけの防災組織である。

ウォーターポロクラブ柏崎

（代表 広川 俊男） 新潟県

「水球のまち柏崎を世界に発信」を目標にした社会人チームの選手達は、日頃の選手強化の練習のみならず6～8月には市内の小学生約100人に、毎週土、日曜日には小学生から大学生まで約130人に対して水球等の指導を行っている。なお、選手のうち6名は筑波大学同窓生である。

岐阜県立大垣桜高等学校 チーム SAKURA

（代表生徒 渡邊 大知） 岐阜県

授業で学んだ知識や技術を生かして、一人暮らしの高齢者に手作りのお弁当や手作りのランチョンマットを届け、お互いに昔話や学校の話などに花を咲かせるなど心む交流の場になっている。

宮島地区パークボランティアの会

(代表 村上 光春) 広島県

以前は秋の空を覆うように飛び交っていたが、今では300匹あまりに減った国の絶滅危惧種ミヤジマトンボ。広島県宮島地区パークボランティアの会では、国内唯一の生息地である瀬戸内海の宮島にある湿地帯を整備し、ミヤジマトンボを保護している。

ミヤジマトンボは汽水性湿地に生息するため、潮の干満の影響を受け易く、海水の通る水路の整備に努めている。

熊野神社 鬼追い保存会

(代表 迫 杉雄) 鹿児島県

千年以上も前から1年に1度、冷たい漆黒の闇の中に突如鬼が表れて暴れる。

行事への参加者は、鬼にたたかれたり、鬼の体にまとった白い紙(御幣)をはぎ取ることができれば招福除災の御利益があるとされ、地元の熊野神社を中心に地域の貴重な伝統行事を継承している。

他県にいる若者が鬼追いに参加するため帰郷して支援している。



ミヤジマトンボの保護活動

伝統行事「鬼追い」

川又文夫さんの清掃活動

湯浅陽三さんの乗る蒸気機関車

漫画点訳の萩谷さよ子さんと仲間

しだれ桜を植える半田彌太郎さん

筑波大学大学院生

大学の教育・研究活動の内容を一般社会人や教育関係者、児童生徒などにわかりやすく伝えるアウトリーチ活動等に従事し、広く社会へ発信する等、大学院における勉学や研究の成果を生かした顕著な社会貢献活動を行った修了生に対して、今年から顕彰対象の中に加えた。顕彰式は3月に開催予定。

個人

川又 文夫

茨城県

「環境保全は実践あるのみ」の信念で定年退職後13年間にわたって、6キロに及ぶ公道のごみ拾いを続けている。「私をみてポイ捨てをする人が一人でも減ればいい」という川又さんの生き方が地域住民の心を動かし、いつの頃からか清掃活動に参加する住民も100人以上に広がっている。

湯浅 陽三

茨城県

元SLの機関士を勤めていた。路線の電化が進み、一

時SLは途絶えていたが、真岡鉄道では、現在SL利用者の期待に答えて、一部でSL運行を行っており、湯浅さんは若い乗務員に運行整備等のノウハウを教えている。湯浅さんは、「煙突から出る煙の量や排気音の違いで、誰が運転しているかわかる」と語る。

萩谷さよ子

茨城県

視覚障害者に、漫画を自分が感じたままの言葉で点訳し、その楽しさを伝え、多くの視覚障害者に喜ばれている。これまでに、「ちびまるこちゃん」「ベルサイユのバラ」など約500冊のコミックを点訳。「漫画は読めないものだと思いついてる人が、今では漫画おたくと化す。少しずつ自立ができるように」と萩谷さんは語る。

半田彌太郎

茨城県

青年時代を過ごしたふるさとに恩返しをしたいとの思いから、旧桜川村の名前にちなみ、100本以上の「しだれ桜」を、学校や公園、河川敷などに自前で植え続けている。「30年後をめざしています、しだれ桜は長寿だから」と半田さんは語る。趣旨に賛同し協力してくれる人たちも増えてきた。

茗溪会のつくば公開講座から

世界を目指す日本サッカー

9月15日(土) 講師 田嶋 幸三
筑波大学大会館国際会議場



55筑体 62筑修
古河電工サッカー一部
で活躍。筑波大体育
科学系助教。協会技
日本サッカー協会理事、
術委員長、専務理事、
副会長。

当日は地元の小中高大学生や地域の方々約120人が集まり、アテネ・北京・ロンドンオリンピックやワールドカップ等のビデオを見ながら、田嶋さんのお話を伺いました。お話の内容は次のようなものです。

■2005年宣言

本日は「夢をかなえるためには、目標の設定とマネージメントが大切である」というお話をしたいと思えます。日本サッカー協会は「サッカーを通じて、豊かなスポーツ文化をつくり、人々の心身の発達を通じて社会に貢献する」という理念のもとに2005年宣言を発表しました。そのビジョンは「サッカーを通じて人々が幸せになれる環境をつくる」ということです。今年のロンドンオリンピックでは男女ともに活躍したのを見て、国民に感動を与えることが出来ました。

2005年宣言では「2015年の約束」というのを掲げています。男子のサッカーで『世界のトップ10』に入るということです。現在、男子の世界ランキングは19(20位)女子は3(4位)です。しかし、世界の8位くらいまでは強豪ぞろいで、そこまでいくのはとても厳しいのですが、あと2年で10位くらいに入りたいと思っています。

また、2050年までにワールドカップの大会を再び

日本で開催したいと考えています。

2005年宣言という「ミッション ステートメント」はたいへん大切なもので、毎日継続して意識し練習を繰り返すことで「文化」になっていくのです。ご存じのように日本のサッカーは「パスをつなぐサッカー」ですが、継続してきたことで現在は「文化」になってきました。

1970年代から80年代の日本のサッカーはバレーボールやラグビーに比べて二流の競技でした。協会の技術委員会は「代表チームの強化」と並んで「ユースの育成」と「指導者の養成」の「三位一体」でサッカー競技の向上を目指しました。

■三位一体

1964年の東京オリンピックではベスト8、1968年のメキシコオリンピックでは銅メダルに輝いた日本のサッカーは、その後、28年間もワールドカップに出場できませんでした。「ユースの育成」と「指導者の養成」が実行できなかったことが原因と思われれます。

2002年の代表である中田・稲本・高原が退いても、現在、遠藤・長谷部・香川・本田といった選手が出てきて活躍しているのは「三位一体」をしつかりやってきたからです。

■言語技術が日本のサッカーを変える

私は1983年から1986年までドイツに留学しました。サッカーを子どもに指導する時に、ドイツでは、なぜ上手いかなかったかを聞くと、子どもが自分の考えをはっきりと言うのを目のあたりにしました。日本では子どもは大部分だまっています。何も言わなければ、何が問題なのか分かりませんし、解決しません。コーチが答えを教えてしまつては、子どもの創造力は育ちません。このことが、サッカーのゲームメイクに大きな差が出てくるのだと思いました。サッカーには「これではなければ駄目」というものはありません。唯一の正解はありません。

昨年の学習指導要領の改訂で「言語活動の重視」が入

ってきました。サッカー協会では1996年から取り入れています。日本のスポーツでは論理的に説明するということは、あまりなされてきませんでした。また、Jリーグが始まった後で、多くの日本人監督が辞めましたが、それは日本にきたジーコやリトバルスキーといった世界的な選手からプレーや作戦について説明を求められても、十分に答えられなかったことも辞めた原因の一つでした。言語技術の差はサッカーでは大きな差になります。日本の文化は「察する文化」だと言われますが、それは世界では通用しません。

さらに大切なのは「躰」です。「人間は教育やある基準を教えないかなければ社会で生活出来ない」と言われます。それは徹底して教えないかなければなりません。

■エリート(英才教育)

2003年から、サッカー協会は「エリート」という言葉を使い始めました。日本では「エリート」という言葉は抵抗の多い言葉です。我々は家柄や学歴ではなく、親からもらった立派な肉体と自らが努力して身に付けた知識や技術を使って「社会のために貢献出来る人」がエリートだと考えています。サッカーでは「英才」を伸ばしていかなければ、世界に勝てません。

■なでしこジャパンの世界一

協会は2003年に女子サッカーのニックネームを「なでしこ」と名付けて、ひたむきに努力している彼女たちを応援しました。誰もワールドカップで世界一になれとは思っていませんでした。なでしこのひたむきで芯が強く明るく礼儀正しいことを世界が認めています。

現在、協会に登録している女子のサッカー選手は3.5万人です。(男子は100万人ですから3.5%です。アメリカではサッカーをやる人は男54対女46です)女子サッカーをメジャースポーツにすることが協会の仕事です。

スポーツには人間を変える力、社会を変える力、国家を変える力があります。私は「それくらいの気持ちでやっていかなければいけない」と思っております。

英語誕生の「秘話」を明かす

講師 藤原保明 (筑波大学名誉教授)

平成24年11月10日(土) 筑波研修センターにて

「藤原教授の英語のはなし」のシリーズは、平成21年3月の「誰が英語を作ったか」を皮切りに、回を重ね、筑波研修センターで行われた今回の公開講座は第6回目となった。英語の誕生に秘められた興味深い出来事に迫る話の内容は以下のとおりである。



という地名は、**アングロ・サクソン**人が侵入するはるか以前から住んでいたケルト系のブリトン

地名に込められた英語の出自

我々がイギリスと呼ぶ国は正式には「大ブリテン島および北アイルランド連合王国」(略称して、**連合王国**)であり、イングランド、ウェールズ、スコットランドという三つの国が含まれている。ブリテン (Britain) 島

人 (Britons) の名称由来は、イングランド (England) とイングリッシュ (English) はゲルマン系の**アングル人 (Angles)**にちなむ。それゆえ、これらの名称はこの島の歴史と深いかわりがある。すなわち、イギリスの正式名称にはブリテン島の周辺地域とアイルランドに追いやられたブリトン人の名称が留められていて、イングリッシュとイングランドにはこの国を造った**アングル族 (Angles)**、**サクソン族 (Saxons)**、**ジュート族 (Jutes)**のうちの一つの部族名だけが残されていることになる。ちなみに、日本語のイギリスという名称はポルトガル語に由来する。

史実の詳細は忘れ去られることが多いが、大英博物館イギリス放送協会、英国航空、英国標準時を始めとする組織や制度などには **Britia** が好まれ、セッター、シェパード、スパニエル、ひいらぎ、あやめ、ばらなどの動植物の名前には主として **English** が使われるなど、両者の区別には地理的・歴史的な関わりがある。

ほとどの間にイングランド全域を制圧するが、ピクト人やスコット人 (Scots) との抗争は続いた。ローマがゴート人 (Goths) の侵攻により危うくなる。そのために、約370年間ローマ軍の庇護の下にあったブリトン人はスコット人やピクト人の来襲に晒された。ローマはブリトン人の要請に応じて二度援軍を派遣し、ピクト人らを撃退したが、3度目の援軍には応じられなかった。困惑したブリトン人は大陸のアングロ・サクソン人に警護を依頼した。彼らは最初のうちは忠実にブリトン人を護ったが、両者の関係はこじれ、彼らは大陸の仲間を呼び寄せた。そこで、449年以降、ジュート族、アングル族、サクソン族が大挙してブリテン島に侵攻し、ブリテン人を周辺地域に追い払い、定住することとなる。

アングロ・サクソン人の侵入と英語の成立

一般に、人が居住地を移しても話す言葉は容易には変わらない。まして、意志の疎通に事欠くほど言葉が変わるには相当の期間を要する。

5世紀の半ば以降、ブリテン島にはゲルマン系の部族による王国が次々に形成された。キリスト教が伝えられると、**ルーン文字 (runes)** に代わってラテン文字による記録が始まった。もともと、その頃のブリテン島の言葉で現存するのはラテン語の文章の行間に注釈として書き込まれた程度のものである。現在の英語の直接の先祖と言える古英語が成立したのは、アングロ・サクソン人がブリテン島に移住してから250年ほど経った8世紀初頭のことである。

最古の英語から今日の英語へ

英語の先祖とはいえ、古英語は英語を母語とする英米人でも全く理解できないほど、アルファベット・綴り方・発音・語形・語義・語順のいずれも、現在の英語とは大きくかけ離れている。古英語が今日のような言葉へと発展するまでに、数百年の歳月と幾多の試練を経なければならなかった。



古英語の主な方言の起源と分布

ストーンヘンジなどの巨石文化を残したイベリア人 (Iberians) の後にケルト人 (Celts) がブリテン島に來住し、ゲール人 (Gauls)、ブリトン人、ピクト人 (Picts) などに分化した。紀元前55年にローマの將軍カエサルが來攻した時に中・南部に住んでいたのはブリトン人であった。

西暦43年以降ローマはブリテン島の本格的な支配に乗り出し、その後40年